

## アステカの人身供犠に関する一試論

### Un ensayo sobre el sacrificio humano entre los mexicas

佐藤 孝 裕

#### 1. はじめに

メソアメリカ Mesoamerica では、古くから人身供犠、平たく言えば人身御供の儀式が行われてきた。すなわち、人間を生贄として神に捧げてきたのである。殊にアステカ人 Aztecas が行った人身供犠については、同時代のスペイン人の年代記作者が豊富な資料を残しているため、広く知られている。メキシコの歴史家エウラリア・グスマン Eulalia Guzman のように、様々な理由を挙げて人身供犠が行われたこと自体を否定しようとする研究者も中にはいるが<sup>注1</sup>、フェルナンド・コルテス Fernando Cortes (1485-1547)<sup>注2</sup>を始めとするコンキスタドール conquistador や、征服戦争に従軍していたベルナル・ディアス・デル・カステリーヨ Bernal Diaz del Castillo (1492?-1585)<sup>注3</sup> のような兵士、及び彼らに伴って新大陸を訪れ、布教活動に従事した宣教師達による報告に見られる人身供犠の描写は極めて生々しく、その全てが単なる捏造とは考えられない。スペイン人による征服活動を徹底的に批判し、「インディオ Indio の擁護

者」と称えられたスペイン人宣教師バルトロメー・デ・ラス・カサス Fr. Bartolome de Las Casas (1484-1566) でさえも、『インディアス文明誌』Apologetica Historia Sumaria の中で、人身供犠を「悠遠の昔、世界中のあらゆる民族、あるいは、その大半があまねく行っていた」とし、具体的に古代のギリシア人・ローマ人・カルタゴ人・トラキア人・スキタイ人・アルカディア人・ケルト人・ユダヤ人を例として挙げた上で、新大陸においてもアステカ人・ Cholula 人・トトナカ人 Totonacas などが行っていた人身供犠の様子について述べている<sup>注4</sup>。これらの史料に加えて、人身供犠が実際に行われていたことを示唆する図像及び彫像などの資料も数多い。これらのことから、かつて彼らが人身供犠を行っていたことは間違いないと思われる。

本稿で筆者が問題にしたいのは、アステカ人が何のためにあのような血生臭い人身供犠を行ったのか、ということである。従来、創造神話に由来する彼ら独自の世界観の中に人身供犠を位置づけ、必然性・必要性に基づいて長年に渡

注1 Gonzalez Torrez (1985) pp.14-5.

注2 コルテス (1980) pp.205-6、pp.311-2、p.370、p.380、p.399、p.409。

注3 ディアス・デル・カステリーヨ (1986a) p.13、p.35、pp.49-51、p.103、p.130、p.153、p.165、p.167、p.174、pp.176-8、p.193、p.205、pp.232-3、p.252、p.301、pp.317-8、pp.328-30、p.371、p.378、pp.380-3、pp.386-7、p.402、p.418；ディアス・デル・カステリーヨ (1986b) p.4、p.26、p.186、p.224、p.275、p.278、p.334、p.341、p.345、p.351、p.362、p.365、p.379、p.382、p.385；ディアス・デル・カステリーヨ (1987) p.23、p.71、p.85、p.103、p.111、p.201、pp.468-9。

注4 ラス・カサスは、カトリックの宣教師でありながら人身供犠を極めて高く評価し、「最良にして一番貴重な、そして、高価にしてこよなく愛するものを、この上なく細心の注意をはらい、熱心かつ懸命に、大変な苦勞をして生け贄として神に捧げる人々は明らかに、神に備わった卓越さ、高貴さ、威厳や価値について、また、被造物が神に負っている借りに関しても、はるかに優れた高貴にして高邁な考えと自然な判断と認識を抱いている」「神々に人間を犠牲に捧げた民族は（悪魔に騙されて偶像を崇拜したもものとしてではあるが）神々の卓越さ、神聖さや価値について、この上ない高邁な考えを抱き、きわめて高貴にして高邁な判断を下したことになる」とまで述べて激賞している。ラス・カサス (1995) pp.215-65。

って人身供犠が行われ続けた、と解釈されてきた。しかしながら、アステカ人が行ったときされる人身供犠の儀式は、「生贄に捧げた人間の数と、そのやり方の恐ろしさの点では、彼らはピルー Piru<sup>注5</sup>いや世界のいかなる国々の人々をも凌駕していた」<sup>注6</sup>と言っても過言ではなく、その大規模さや組織性の点で他を圧しており、単に宗教的必然性のみを理由にするだけでは到底説明が困難である。そこで、アステカ人がなぜあのように組織的に、大規模に人身供犠を行ったかについて、16世紀スペインの年代記作者が残した史料を用いながら、試論を述べてみたい。

## 2. 人身供犠とは

人身供犠というのは、端的に言えば、生きた人間を儀礼を通じて殺し、その血や肉を神や超自然的存在などに捧げる行為のことであり、南北アメリカ大陸、アフリカ、オリエント、地中海周辺、ケルト、インド、中国など、世界各地で行われた。その目的として、波平は次の三点を挙げている<sup>注7</sup>。

①神などの加護を得て、雨や豊穰など人間にとって望ましい結果を得ようとする。

②疫病の流行、天災などの災厄を神などの怒りと考えて、それを宥め神を慰める。

③食人儀礼と結びついて、神に人間を捧げると同時に、その血や肉を神と共に食べることで通常とは異なる力を得ようとする。

強化儀礼に属する①と、③は定期的で、状況儀礼（危機儀礼）に当たる②は何らかの危機的状況に陥った際に、必要に応じて行われたと考えられている。

たとえば、古代イスラエルでは、初めて生まれた子供を神に捧げた。エクアドルのいくつかの民族は、スペイン人に征服された後も、毎年収穫のために100人もの子供を神の生贄にし

た。

又、東部インドのコンド Kond 系民族クッチェア・コンド Kuttia kond は、19世紀半ば以降は水牛を捧げているが、かつては作物の豊穰を祈って地母神にメリアー meriah と呼ばれる人身御供を供犠していた<sup>注8</sup>。更に、ミンダナオやボルネオの先住民は、近年まで人身供犠を行っていた。

日本にも、各地に人身供犠の伝説がある。だが、上述した世界各地の例とは異なり、供犠の対象は大蛇やヒヒなどの怪物であることが多く、最後は英雄や高僧など特別な能力を持った人間によって退治される<sup>注9</sup>。中でも出雲のヤマタノオロチの伝説は、最も人口に膾炙したものの一つであろう。又、全国各地に見られる「おなり田」の地名は、昔田植えの際に「おなり」と呼ばれる昼飯を運ぶ美しく装った女を犠牲にする風習に発したというし、追儺祭の鬼の役が、かつて旅人を捕えて犠牲にした風俗の名残だという説もある<sup>注10</sup>。城を築いたり橋をかけたりした際に、「人柱」といって人間を生きたまま埋めたという伝説も日本各地にあり、よく知られている<sup>注11</sup>。ただ、これらの伝説の信憑性に関しては、疑わしいと考えられているのが一般

注8 小西 (1987) p.224。

注9 棚瀬・大藤 (1973) pp.486-91。

注10 棚瀬・大藤 (1973) p.491。

注11 人柱についての伝説は、古くは『日本書紀』の仁徳天皇紀にまで遡る。他に有名な例としては、幸若舞の本「築島」に見られる平清盛の時代の輪田泊建築に関わる経ヶ島の人柱伝説、『神道集』巻第三十九の「橋姫明神のこと」に記されている摂津の長柄橋の人柱伝説などが挙げられる。戸塚 (1986) pp.739-40。大分県内においても、中津の沖代平野の鶴市、宇佐市四日市元重の小倉池の久良、国東町岩戸寺の山口池と同町横手の平六池、同町富来城、大分の初瀬井路のハツ、同市府内城のミヤなどの人柱伝説が知られる。梅木秀徳 (1974) pp.210-6。又、かつて日本で人柱などの生贄が行われたかについては、最近は余り研究の対象にはなっていないが、戦前は盛んに議論されており、そのことは磯川 (1998) に詳しい。但し、人柱自体は、アジア、ヨーロッパ、アフリカや、オセアニアの一部でも見られる世界的習俗で、国家や都市を持つ伝統的な高文化社会に多く分布している。宇野 (1987) p.629。

注5 ベルーのことで、ここではタワンティンスーユ Tawantinsuyu、いわゆるインカ Inca 帝国のことを指している。

注6 モトリニア (1979a) p.191。

注7 波平 (1988) p.612。

で、今のところ日本で実際に人身供犠が行われたかどうかは定かではない。

### 3. メソアメリカの人身供犠

メソアメリカにおける人身供犠の起源は、少なくとも古典期には遡る。それよりも古い先古典期のイサパ Izapa の石碑に、球戯の後に敗者の首を切ったらしい光景が刻まれていることから、人間を生贄にする儀式がかなり早くから行われていたことが窺える。しかし、それが広がりを見せ始めるのは古典期に入ってからで、この頃には各地で人身供犠が行われていた。たとえば、メキシコ湾岸のベラクルス Veracruz 文化のエル・タヒン El Tajin では、人身供犠が球戯や死と密接に結び付けられていた<sup>注12</sup>。球戯場に刻まれた浮き彫りには、死の神が生贄の心臓の上にフリント製のナイフを振り上げている光景が描かれており、球戯での勝者が球戯場の中で敗者を生贄にしたものと推測できる。

マヤ Maya 地域でも、数々の図像学的証拠から見て、古典期に既に人身供犠が行われていた可能性は高いと思われる。たとえば、ピエドラス・ネグラス Piedras Negras の石碑11では、供犠に供された者の胸が切り開かれ、胸からほとぼしる血が羽で表わされている<sup>注13</sup>。又、ここから出土した土器には、幼児が生贄に捧げられようとしている光景が描かれている。

古典期マヤの人身供犠は、都市国家の王が自分の王としての正統性を神々に認めてもらうために、戦争で捕えた捕虜を人身供犠に供し、神々の好む食物である血を捧げたものと考えられている。それは同時に、家臣や民衆に自分の力を顕示するパフォーマンスでもあったろうと考えられる。従って、捕虜は身分が高ければ高いほどよかった。他国の王であれば申し分なかった。実際、他国の王を供犠に捧げた例もある。737年、東南部を代表する都市国家コパン Copan の「18兎」王は、キリグア Quirigua の「カワック Cauac の空」王に捕えられ、生

贄に捧げられている。

いずれにせよ、古典期の人身供犠の性格は個人的であり、アステカ人が行ったように大々的なものではなかった。しかも、古典期マヤ社会に人身供犠が広く行われていたことを示す証拠は、現在のところ見つかっていない<sup>注14</sup>。

人身供犠が日常化・一般化したのは、後古典期に入ってからである。この時代に書かれたいわゆる『マドリッド文書』Codice Tro-Cortesiano には、胸が切り開かれた人間の図が見られるし、後古典期前期を代表する都市国家チチェン・イツァ Chichen Itza から出上した円盤にも、明らかに心臓を摘出している人身供犠の場面が描かれている。この他にも、この遺跡にはチャクモール Chacmool を始め、人身供犠を示唆するものが多々見られる。又、フランシスコ Francisco 会の司教ディエゴ・デ・ランダ Fr. Diego de Landa (1524?-1579) は、『ユカタン事物記』Relacion de las cosas de Yucatan の中で、1511年にユカタン半島に漂着したスペイン人のうち、4人がマヤのあるグループに捕まって生贄にされたことや、その後のマヤ人との戦いの中で、何人もの捕虜になったスペイン人が生贄に捧げられたことを記している<sup>注15</sup>。又、チチェン・イツァのセノーテ cenote では、神々への供犠として生きたままの人間を早魃の時に投ずる習慣を持っていたとも記している<sup>注16</sup>。ランダは人身供犠の目的についても言及し、次のように述べている<sup>注17</sup>。

「こうした祭儀は彼らの神々を慰め、かつ喜ばせるためのものだったから、神々の怒りさえなければ、祭儀をこれ以上血なまぐさいものにするようなことはなかった。彼らが、神々が怒っていると考えたのは、飢餓や疫病や、争い事や、凶作などの不幸に見舞われた時で、こうしたことが起これば、彼らは悪魔の心を和らげることに努め、動物を生贄に捧げたり、

注14 Soustelle (1984) p.2.

注15 ランダ (1982) p.248, p.250.

注16 ランダ (1982) p.294, p.445.

注17 ランダ (1982) p.448-9.

注12 コウ (1975) pp.140-3.

注13 Schele (1984) pp.8-9.

自らの血を流したり、徹夜や断食をするだけに止まらず、自然の慈悲心や理性の法則をすべて忘れ、邪悪な神官すなわちチラン chilam たちが必要とのかたり、首長たちがその気になった時にはいつでも、また何度でも、まるで鳥を生贄にするような気軽さで、人間を生贄に供した。」

このランダの記述からも、後古典期のマヤ人が行っていた人身供犠は状況儀礼（危機儀礼）的な性格を持つものであり、恒常的なものでもなければ、大規模なものでもなかったことがわかる。

#### 4. アステカの人身供犠

以上見てきたように、古くからメソアメリカの各地で人身供犠は行われていたが、それが国家的行事として、大規模に、組織的に行われたのは、アステカにおいてだけであった。このことは、様々な年代記作者達が伝えている。中でも特に詳しいのは、イエズス Jesus 会士ホセ・デ・アコスタ Jose de Acosta (1540-1600) の『新大陸自然文化史』 *Historia natural y moral de las Indias* に見られる記述であろう。そこで、アステカ人がどのようにして人身供犠を行っていたかを、アコスタの記述を引用して紹介したい<sup>18</sup>。

「しゃれこうべの柵の内部に、生贄になる者たちを集め、その柵の根本で儀式を行い、まわりを大勢の監視者で取囲みながら、それらの者たちを柵の下で数珠つなぎにする。それが終わると、縁に飾りのいっぱいついた短い白衣をつけた神官が現れ、神殿の高いところから、偶像をかかえて降りてくる。その偶像は、小覓こびゆと玉蜀黍を蜂蜜でこねて作り、縁の玉の眼を入れ、玉蜀黍の粒で歯がつけられている。そして神官は神殿の階段を、あらん限りの速度で降りてきて、内庭のまんなかにある、ひじょうに高い礼拝台の上に置かれた大きな石の上に昇る。この石

はクアウシカリ Cuauhxicalli と呼ばれ、鷲の石の意味であった。

さて、神官は、礼拝台の前の階段を昇り、降りるときは、反対側にある階段を使ったが、始終偶像をしっかりと抱いていた。彼は、生贄に捧げられる予定の者が集まった場所に昇り、端から端まで、「これがあなたの神だ」、と言いながら、ひとりひとりに偶像を見せて歩く。それが終わると、反対側の階段を降り、死すべき運命にある者たちは、列を作って、生贄にされることになっている場所に行く。そこには、すでに彼らを生贄に捧げるための祭司が準備をして待ちかまえている。

人身御供のふつうのやり方は、生贄の胸を切開き、まだ半分生きている心臓をつかみ出すのであった。死体は、神殿の階段からころがし落したので、階段は血を浴びた。もう少し詳しく説明すると、要点は、供犠場にこの要職のために選ばれた六人の執行人が現れ、そのうち四人が生贄になる者の手足を、ひとりが頸をおさえ、もうひとりが胸を切開いて、犠牲者の心臓を取出すのである。これらの者はチャチャルムーアと呼ばれ、われわれの言葉でいうと、神聖な仕事を司る者、の意味である。この者は最高の高僧で、彼らの間にあつては大いに尊敬され、その地位は、長子相続による世襲制であった。そのうちで六番目の、殺しの役を引受ける祭司は、最上級の神官または大祭司とみなされて尊敬を受けていたが、犠牲奉納の行なわれる時期と儀典の種類によって、その名称も異なっていた。また、その職務を執行するために姿を現すとき、時節を異にするにしたがつて、衣服も変える。この高僧は、パパ papa、およびトピルシン topilzin と呼ばれ、そのまとう衣服は、助祭服のような工合に、赤い布地で作られ、縁に房飾りの縁とりがしてあった。頭には、緑と黄の色彩豊かな羽毛冠をかぶっていた。耳には

注18 アコスタ (1966) pp.192-6.

黄金の耳飾りのようなものをつけていたが、それには緑色の石がいくつもちりばめられていた。また、唇の下の、ひげのまんなかへんには、青い宝石の管のようなものが、一片ぶら下がっていた。

これら六人の執行人が出てくるときには、顔と手を、黒光りする色に塗りたくっている。五人は、縮れ、もつれた髪をし、頭のまんなかには皮の帯を結んでいる。額には丸い小さな、多くの色で塗られた髪をつけ、黒糸で刺繍した白い祭服を着ていたが、このような衣裳で悪魔と同じ格好をしていたのである。このような連中が、恐ろしい顔をして姿を現わすのを見ると、民衆はひじょうな畏れを感じたのである。最高の神官は、堅い石で作った、ひじょうに幅広く、先の尖った大きな短刀を手にしていて、もうひとりの神官は、蛇の形が刻まれた木の首飾りをしていて、

これら六人の者は、偶像の前にならぶと、身を低くして拝み、偶像の部屋の人口の前にある、と前に述べたピラミッド形の石の前に整列する。その石の頭は極めて尖っているので、生贄に捧げられる者の背中をそこに仰向けにつけると、からだかふたつに折れ、その結果、短刀を上からぼんと突き刺せば、いとも簡単に生贄のからだか、まんなかで裂けるのだった。

これらの執行人たちがぜんぶ勢揃いすると、祭りで生贄に捧げられる予定の戦争の捕虜がぜんぶ引出され、嚴重な見張りのもとに、裸になって整然と列をつくり、あの大きな階段を昇らされ、祭司たちの待つ場所に連れて行かれる。そして、そこに到着すると、そのひとりひとりが順番に六人の執行人によってつかまえられて、片足、片手を一本ずつ取押さえられ、尖った石の上に仰向けに寝かされた上、第五の執行人の手で首あてを押しつけられる。そして最高の神官が、例の短刀により、驚くべき速さで胸を切開き、

心臓を手づかみで取出して、湯気の立つまま太陽に向けてかざす。心臓の熱と蒸気は太陽に捧げられるものなのだ。そしてまた偶像のところに向きなおって、その顔に心臓を投げつける。生贄の死体は、神殿の階段に投げ落とされるとそのまま自然にころがり落ちてゆく。というのは、石が階段のすぐ近くに据えられていて、最初の一段との間の距離が二ピエ pie しかなかったから、死体をひと蹴りすれば、階段を下に落ちていったのである。

このようにして、ひとりひとり生贄に捧げ終わり、死体が下に投げ落とされると、それらを捕虜にした持主たちがそれをおこし、運ばせて分配する。そして、厳粛な祝いを行って、その肉を食べる。彼らは、捕虜を捕える術にたけていたので、その数はどんなに少なくとも、いつも四、五十人を越えていた。〔メヒコ Mexico 人の〕近隣の人々も、その神々への勤めにおいて、メヒコ人の儀式、儀礼を真似していた。〕

心臓の摘出時とその後の場面の描写とについては、征服後に最初にメキシコにやって来たフランシスコ会士の一人トリビオ・デ・モトリニア Toribio de Motolinia (1489?-1569) の『ヌエバ・エスパニヤのインディオの歴史』 Historia de los indios de Nueva España に、後で述べるパンケツァリストリの祭を例に取った更に詳しい記述が見られるので、次にそれを引用して紹介したい<sup>注19</sup>。

「ところでかくも恐ろしい行為をやったのける例の儀式の執行者は、取り出した心臓を神殿の人口のマグサ石の外側に向けて投げつけ、そこに血の跡を付ける。落ちてくる心臓は地上でまだ少しビクビクしているが、その後すぐに祭壇の前に置かれた碗形の容器に入れられる。またあるいは心臓を取り出すとこれを太陽に向けて高く差し上げることもあれば、時には心臓を老神官たちが食べてしまう場

注19 モトリニア (1979a) pp.99-100。

合もあるし、あるいは地中に埋めることもある。

心臓が抜き取られた後の犠牲者の身体は、ただちに人の手によって石段の上から投げ出され、ゴロゴロと落ちていく。下に落ちた死体は、もしそれが戦争捕虜のものであれば、彼を捕えた者が自分の友人や親戚の者たちと協力して運び去ってしまう。そしてほかの食物と一緒にその肉を料理して、翌日宴会を開きそこで食べてしまう。そしてこの際に、捕虜を捕えた本人にもしりするだけの財力がある場合には、彼は招待客たちに織物を贈る。犠牲者が奴隷であれば、その死体は投げ出されず、人々の腕に抱えられて下に降ろされる。そして捕虜の場合ほど盛大ではないが、同じように人を招いて宴席が設けられる。のちほど述べるように、ほかの祭りの場合にはもっと別の儀式も行なわれ、それによって祭りの日数も多くなるのだが、この祭りの時は以上述べただけである。

犠牲者から取り出した心臓についていうと、あの悪魔に仕える神官は犠牲者の心臓を取り出すやこれを手に乗せ、あたかも太陽に見せるかのように高々と挙げ、次いで神像に対しても同じことを繰り返す。こうしてから神官は、色を塗った木製の容器の中に心臓を納める。この容器は碗よりは大きかった。そしてもうひとつの容器には血を溜めて、溜まった血をまず主神の像の唇に塗りつけ、それから悪魔を形どったほかの神像にも同じことを繰り返す。これはあたかも神像に食物でも与えているかのように見えた。」

以上、アステカにおいて人身供犠がどのようにして行われたかを述べた。では、このような人身供犠はどのような場合に行われたのであろうか。それには非常時に行われたものもあれば、定期的に行われたものもある。そこで次に、曆に基づいて毎月行われていたという人身供犠について、フランシスコ会の宣教師であったベルナルディーノ・デ・サアグン Bernardino de

Sahagun (1499?-1590) が『ヌエバ・エスパーニャ総覧』Historia general de las cosas de Nueva España<sup>註20</sup>で述べている記録に基づいて紹介したい<sup>註21</sup>。なお、ここで用いられている曆はシウイトル Xiuitl と呼ばれる太陽曆で、1カ月を20日とし、その18ヵ月をもって1年としたものである。残った5日はネモンテミ Nemontemi と呼ばれ、不吉な日と考えられた。

(1)アトルカワロ Atlcaualo (水が止まる)、あるいはクワウイトルエワ Quahuitlehua (木々が立ち上がる)

2月1日～2月21日<sup>註22</sup>

初日に雨の神トラロック Tlaloc に仕える神々、あるいは彼らの姉で水の女神チャルチウトリクエ Chalchiuhtlicue、あるいは風の神ケツアルコアトル Quetzalcoatl、あるいはこれら全ての神々のための祭が行われた。雨乞いのために、多くの子供が各地の山頂で生贄にされ、摘出された心臓が水の神々に捧げられた。特に頭につむじが2つある乳幼児が選ばれて、両親から買い取られた。つむじが渦など水に関連するものを暗示しており、それが二つあれば雨乞いの効果が倍増すると考えたからであろう<sup>註23</sup>。立派な衣装を着せられた生贄の子供達は、羽根や花で飾られた輿に乗せられ、人々はその前を楽器を鳴らし、歌い、踊りながら進んだ。子供達を連れて行く際、子供が泣いて大きな涙をこぼすと、雨が多い年になる前兆だとして、人々は喜んだ。

注20 サアグンが長年にわたって先住民の情報提供者を利用して収集したアステカ文明全般についての詳細な記録の集大成で、1569年頃ナワトル Nahuatl 語で完成した。染田 (1995) pp.152-84。

注21 サアグン (1992) pp.90-113。

注22 アステカの曆の元旦は、年代記者によって異なる。たとえば、アコスタは2月26日と記しているし、ディエゴ・ドゥラン Diego Duran、モトリニーアやバラデス Baradez は3月1日、ガマ Gama とフンボルト Humboldt は3月9日と記している。アコスタ (1966) p.259；モトリニーア (1979a) p.89；高山 (1966) pp.535-6。

注23 高山 (1979) p.107。

山や湖で生贄にされた子供達の死体は、煮て食べられた。

この月には、子供達の他に、多くの捕虜が水の神々への生贄にされた。彼らは白のような石に紐で結ばれ、刃のついていない木製の剣と盾を持たされ、彼らの所有者である完全武装した戦士と戦わされた。切り倒された捕虜は、ヨピコ Yopico という神殿に連れて行かれ、心臓を取り出された。こうして捕虜を殺す際に、捕虜を倒した所有者は、羽根飾りを身につけ、踊って勇ましさを誇示した。

(2)トラカシペワリストリ Tlacaxipehualiztli (人の皮剥ぎ)

2月22日～3月13日

初日に、トテック Totec (我らが主)、別名シペ Xipe (皮) のための祭があり、多くの奴隷や捕虜<sup>注24</sup>が生贄にされ、皮を剥がれた。皮を剥ぐのは、植物の再生を司る神シペ・トテックのためと考えられる<sup>注25</sup>。

捕虜は、所有者によって髪の毛を引っ張って、神殿に連れて行かれた。神殿の階段を登らされた後、石の台の上に仰向けに寝かされ、手足と頭を5人にそれぞれ押さえられた。それから神官が燧石でできたナイフで胸を切り開き、心臓を取り出した。神官はその心臓を太陽の方に差し上げた後、椀のような容器に投げ入れた。残

注24 アステカ世界における奴隷は、旧世界の奴隷とは極めて異なる。人身供犠との関連のみに関して言えば、戦争で捕らえられた捕虜は生贄に捧げるためのものであり、奴隷にはならなかった。又逆に、奴隷が生贄に捧げられることは滅多になかった。モトリニア (1979a) p.52; モトリニア (1979b) p.540、p.558。

注25 高山 (1979) p.111。

注26 若者達の父親役をする神殿の祭司。サアグン (1992) p.92

注27 各地区にあった宮殿のような大きな建物で、地区を治める者達が協議のために集まった。サアグン (1992) p.92。

注28 モトリニアによると、各都市の要人、テノチティトラン Tenochtitlan の場合は王が、剥がされた皮を着て踊り、大勢の人々がそれを見に来たという。又、こうして皮を剥がされた犠牲者の数は、2人から10人と場所によって異なり、テノチティトランでは12人から15人にも上ったという。モトリニア (1979a) pp.100-1。

った死体は、階段の上から転げ落とされ、下の広場で待ち構えるクワククイルティン *guauguacuiltin*<sup>注26</sup> によって自分のカルプリ *Calpulli*<sup>注27</sup> に持ち帰られた。そこで皮を剥がれ、肉は切り刻まれて皆で食べられた<sup>注28</sup>。

又、アトルカワロに買い取られた子供達のうち数人が、雨乞いのために殺された。

(3)トソストトリ Tozoztontli (小徹夜)

3月14日～4月2日

初日に、雨の神トラロックのための祭が行われ、多くの子供が雨乞いのために山頂で生贄にされた。

(4)ウエイ・トソストリ Huey tozoztli (大徹夜)

4月3日～4月22日

初日に、トウモロコシの穂の神シンテウトル *Cinteotl* のための祭があり、ここでもアトルカワロに集められた子供が、雨がたっぷり降り始めるまで生贄に捧げられた。

(5)トシュカトル Toxcatl (乾燥したもの)

4月23日～5月12日

初日に、神の中の神テスカトリポカ *Tezcatlipoca* のための祭が行われ、祭の1年前に選ばれた1人の若者が生贄に捧げられた。この若者は、体格が優れていて、体に全く欠点がない者でなくてはならず、選ばれてから祭の日までの1年間あらゆる快楽が与えられ、笛の吹き方、歌い方、話し方を教えられた<sup>注29</sup>。この祭は、全ての祭の中心となるものであった。祭の20日前、若者にはこの祭のために育てられた4人の美しい娘が与えられ、彼は20日間これらの女性と肉体関係を持った。ちなみに、この4人の娘には、再生する植物の女神ショチケツアル *Xochiquetzal*、若いトウモロコシの女神シローネン *Xilonen*、大地母神アトラトナン *Atlantlan*、塩の女神ウイシュトシワトル *Huixtocihuatl* という名がつけ

注29 アコスタによると、逃亡を防ぐため、常に12人の戦士が監視のために同伴していた。又、同様の理由で、夜は木製の檻の中に入れられていた。アコスタ (1966) p.198。

注30 高山 (1979) p.120。

注31 「矢の家」という意味で、ウイツィロポチトリ神殿の苦行の場所。サアグン (1992) p.96。

られた。この神々の性的関係から、テスカトリポカの力で大地が初めて恵みを受けることができるのだということが、象徴的に表わされているように思われる<sup>注30</sup>。生贄の儀式が行われる当日に、若者はトラコチカルコ Tlacochealco<sup>注31</sup>という神殿に連れて行かれた。娘達と離れて一人になった彼は、自ら階段を上り、1段ごとに1年間吹き続けた笛を砕いていった。最上段に辿り着くと、石の台に寝かされ、心臓を摘出された。死体は丁重に下に降ろされ、そこで首が切られ、ツォンパントリ Tzompantli<sup>注32</sup>に刺された。こうして生贄に供された若者は、戦士の守護神であり永遠に歳とらぬ若者であるテスカトリポカの化身と考えられた<sup>注33</sup>。この他に、アステカの部族神であり最高神でもあるウィツィロポチトリ Huitzilopochtli の化身と考えられていた若者も、一緒にこの祭のために教育され、祭の最後に生贄にされた。

(6)エツアルクワリストリ Etzalcualiztli (トウモロコシの粥を食べる)

5月13日～6月1日

この月には、雨の神トラロックに仕える神々

注32 生贄の頭蓋骨を刺して陳列する棒杭があった基壇。モトリニアに次のような記述がある。「悪魔の神殿の脇には棒が立てられていて、そこには頭蓋骨が掛けられていた。こうした棒がかれこれ15本から20本ほど立っていた。棒の長さは地上部分が4ないし5ブラサーダ brazada、地下部分が1ブラサーダ以上あった。棒は丸太の柱で、一列に並んで立てられた柱と柱との間隔は約6フィート空いていた。柱には全部穴がたくさんあけられていた。頭蓋骨のこめかみの部分に穴があけられ、そこに別の細い棒を通して数珠繋ぎにし、これを先の丸太棒の穴に差し込んで掛けるのである。こうして頭蓋骨が500から600ずつ掛けられ、場所によっては1000個ずつ掛けられていることもあった。」モトリニア (1979a) pp.124-5。

注33 高山 (1979) pp.120-1。

注34 モトリニアには別の記述がある。それによると、この祭の20～30日前に男女一人ずつの奴隷を買って夫婦のように一緒に住ませ、祭の際にそれぞれ水神トラロックとその妻である水の女神チャルチウトリクエの扮装をさせ、一日中踊らせた後真夜中に生贄に捧げ、特別に作った深い井戸のような穴に投げ込んだ。モトリニア (1979a) p.102

の持ち物を身につけた多数の捕虜や奴隷が、トラロックの神殿で生贄にされ、心臓は湖の渦巻きに投げられた<sup>注34</sup>。

(7)テクイルウィトントリ Tecuilhuitontli (君主達の小さな祭)

6月2日～6月21日

初日に、トラロックに仕える神々の姉と言われた塩の女神ウィシュトシワトルのための祭が行われ、ウィシュトシワトルに扮した女性が殺された。この祭の前夜、この女性は、老若を問わず多くの女性達と一緒に、一晩中歌ったり踊ったりした。夜が明けると、皆で踊りながら、ウィシュトシワトルの衣装をまとった女性と共に、たくさんの捕虜をトラロックの神殿に連れて行き、先ず捕虜達を、そして次にウィシュトシワトルに扮した女性を生贄に捧げた。

(8)ウエイ・テクイウイトル Huey tecuihuilitl (君主達の大祭)

6月22日～7月11日

初日に、実がなる前のトウモロコシであるシロテ xilote の女神シロネンのための祭があり、10日目にシロネンに扮した1人の女性がシンテウトルの神殿で生贄に捧げられた。その前夜、神殿に仕える女性達シワトラマカスケ Cihuatlamacazqui がシロネンの衣装をまとった女性を取り囲み、皆で一晩中踊り、歌った。夜が明けると、貴族と戦士が踊りながら神殿に向かって進み、女性達もその後を進んだ。神殿まで来ると、シロネン役の女性は階段を連れて上がりされた。上に着くと、神官の1人が彼女を背中を合わせて背負い、頭を切断し、それから心臓を取り出した。摘出された心臓は、太陽に向かって差し上げられた。

(9)トラシヨチマコ Tlaxochimaco (花の分配)

7月12日～7月31日

初日に戦いの神ウィツィロポチトリのための祭が催された。トラシヨチマコはミクカイルウィトントリ Miccailhuitontli (死者の小さな祭)とも呼ばれ、死者に供物が捧げられたが<sup>注35</sup>、人身供犠が行われたという報告はない。

(10)シヨコトル・ウエツィ Xocotl uetzi (果実

注35 高山 (1979) p.132。

が落ちる)

8月1日～8月20日

初日に、火の神シウテクトリ Xiutecuhtli のための祭が行われ、多数の奴隷や捕虜の手足を縛って生きたまま火の中に投げ込み、死ぬ寸前に火中から引きずり出し、この神の像の前で心臓を取り出した。

祭の前夜、捕虜の所有者達は、体を火の神の服の色である黄色に塗り、羽根飾りや衣装をまとして、夜まで捕虜を伴って歌い、踊った。一晩中神殿で寝ずに過ごした捕虜達は、数々の儀式の後、死の恐怖を感じないように顔にヤウトリ yautli という香草の粉を塗られ、気を失わされた。持ち主達は捕虜の四肢を縛ると、肩に担いで火の回りを踊るようにして回った。そして間を置きながら、一人ずつ火中に捕虜を投げ入れた。火に焼かれながらも、まだ息があり、もがいている捕虜を鉤のついた棒で引きずり出し、台の上に乗せ、胸を切り開いて心臓を取り出した。

(11)オチパニストリ Ochpaniztli (掃き清め)

8月21日～9月9日

初日に、神々の母である大地母神テテウインナン Teteoinnan、あるいは「我らの祖母」トシ Toci のための祭が催された。

この月が始まって8日経つと、テテウインナンに扮した女性が現れ、様々な儀式が行われた。その後、彼女が死ぬ当日の夜になると、生贄に捧げられることを悟られないように努め、着飾らせ、神殿に連れて行った。階段を上ると、1人の男に背中合わせに背負われ、すぐに頭を切断され、皮を剥ぎとられた。その後、剥いだ皮を身につけた屈強な神官は、ウィツィロポトリ神殿まで行き、ウィツィロポトリ像の前で4人の捕虜の心臓を抉り出し、他の神官が他の大勢の捕虜の心臓を取り出した。

(12)テウトレコ Teotleco (神々の到来)

9月10日～9月29日

よそに出かけていた全ての神々の帰還を祝い、この月の最後の日に大祭を催し、大勢の捕虜を生きたまま火炙りにした。

(13)テペイルウィトル Tepeilhuitl (山の祭)

9月30日～10月19日

雲が湧く高い山々を称えて祭を行い、テポシヨチ Tepexoch (山の花?)、マトラルクエイエ Matlalcueye (青緑のスカートの女)、シヨチテカトル Xochitecatl (シヨチトラン Xochitlan の女)、マヤウエル Mayahuel (ブルケ酒pulgueの女) と呼ばれる4人の女と、ミルナワトル Milnahuatl (畑の近くにいる者) と呼ばれる1人の男を生贄に捧げた。彼らは、ゴム液が染み込んだ紙をたくさん体に張り付けられ、着飾った女性が担いだ輿に乗せられて運ばれた。そして、殺されて心臓を取り出された後、亡骸は静かに階段から転がされた。下で切断された頭は棒に突き刺され、体はカルプリに持ち帰られ、皆で食べられるよう分けられた。この月はほとんど雨が降らない月なので、取り出された5人の生贄の心臓は雨の神トラロックに捧げられた<sup>注36</sup>。

(14)ケチヨリ Quecholli (へら鷲)

10月20日～11月8日

狩猟の神ミシュコアトル Mixcoatl (雲の蛇) の祭が行われた。11日目にテノチティトランとトラテロルコ Tlatelolco の人々は拳で狩りを行い、その後トラマツィンコ Tlamatzinco という名の神殿で多数の捕虜や奴隷を生贄に捧げた。その際、あたかも鹿を殺すのと同じように、両手と両足を縛って神殿の階段を運び上げ、荘厳な儀式のうちに殺した。又、ミシュコアトルとその妻に扮した男女が、ミシュコアテウパン Mixcoatepan という別の神殿で生贄に捧げられた。

(15)パンケツァリストリ Panquetzaliztli (幟立て)

11月9日～11月28日

戦争の神ウィツィロポトリの祭が催された。

この月の9日目、生贄になる者の身繕いが厳かに行われ、彼らの体は様々な色に塗られ、たくさん紙で飾られた。

注36 高山 (1979) p.142。

19日に数々の儀式が行われた後、生贄になる者達がウィツィロポチトリの神殿から下りて来た。その中で、パイナル Paynal 神に扮した者が中庭のテウトラチトリという球戯場で4人の奴隷を殺した。その後町を1回りし、その間一定の場所で、1箇所につき1人の奴隷を殺した。

多くの儀式が終わった後、最後にウィツィロポチトリ神殿で、大勢の捕虜と奴隷が一人ずつ楽器が打ち鳴らされる中で殺された<sup>注37</sup>。

(16)アテムストリ Atemoztli (水が落ちる)

11月29日～12月18日

この月の末日に雨の神々の祭が行われた。その際、山の神像テピクトリの胸を切り開いて心臓を取り出し、頭を切断し、体を分け合って食べたが、人身供犠についての言及はない<sup>注38</sup>。

(17)ティティトル Tititl (しわ、縮み)

12月19日～1月7日

イラマテクトリ Ilamatecuhtli (老女達の長)、別名トナ Tona (我らが母)、又はコスカミアウ Cozcamiauh (穂の首輪)という女神の祭が行われ、イラマテクトリに扮した女性を1人生贄に捧げた<sup>注39</sup>。彼女は数名の老人が伴奏する中、一人で踊りながら、自分をやがて待ち受けている運命を思って泣いた。午後になると、全ての神々の装飾品を身につけた神官達の前について神殿まで進み、そこで石の台の上に横たえられ、心臓を摘出され、頭を切断された。神官の1人が頭の髪の毛をつかんで、歌い踊った。

(18)イスカリ Izcalli (生まれ変わり)

1月8日～1月27日

火の神シウテクトリあるいはイシュコサウキ Ixcozauhqui の祭が行われた。4年毎の閏年に多数の捕虜や奴隷を生贄に捧げたが、それ以外の3年の間にはこの月には誰も殺さなかった。

(19)ネモンテミ (無駄な日々)

1月28日～2月1日

不吉で不運だと考えられた5日間で、神々への祭も行われなかった。

以上がシウイトルに則って毎月のように行われた人身供犠だが、この他にも、もっと長い周期で定期的に行われた人身供犠がある。それは、「新しい火の儀式」と呼ばれたもので、52年毎の周期の終わりに、メキシコ市近郊のウィシャチテカトル Huixachtecatl 山の頂上に、新たな火が点された。マヤも同様だが、アステカでも、トナルポワリ Tonalpohuali という260日を周期とする暦と、シウイトルという360日を周期とする太陽暦が用いられていて、この二つを合わせた循環暦の周期が52年だった。そして、この52年の周期毎に人類に新しい転機が訪れると考えられ、重要な意味が持たせられていた。言い換えれば、世界の終わりとなりあう可能性のある時として重要視されたのである。この52年の期間の最後の日には、テノチティトランのみならず、テスココ Texcoco や、それらの支配下の全ての大きな町中の火がごとごとく消された。家々では、食器類が壊されもした<sup>注40</sup>。そして真夜中になると、先の山頂では、テノチティトランからやって来た神官達がブレアデス星団が現れるのを待ち受けた。星が出現すると、生贄に捧げられた1人の捕虜の胸が切り開かれ、そこに新たな火が点された。その日は松明に移され、テノチティトランに届けられた。こうして点火の儀式が終わると、世界は破滅せず、再び新しい周期が始まったことを

注40 スーステル (1971) p.73。

注41 この「新しい火」の儀式が初めて行われたのは、アステカ人が彼らの出身地とされるアストララン Aztlan を出てから丁度52年目に当たる1163年のことであり、場所はコアテベック Coatepec であったとされる。高山 (1979) p.51。

注42 モトリニア (1979a) p.95。

注37 この祭で人身供犠に捧げられる捕虜や奴隷の数は、20名から60名くらいと場所によって異なり、テノチティトランでは100名以上にも上ったとされる。モトリニア (1979a) p.100。

注38 モトリニアは、メキシコ市では、この月に幼い男女一人ずつを小舟に乗せて湖に漕ぎ出させ、湖の真ん中で生贄に捧げ、船もろとも沈める習慣があったと記している。モトリニア (1979a) p.108。

注39 モトリニアは、遠い地方の部族との戦いで捕らえた捕虜が生贄に捧げられた、と記している。モトリニア (1979a) p.110。

人々は喜びあったのである<sup>注41</sup>。こうして国中で新しい周期の始まりを祝ったのだが、中でもテノチティトランで催された祭はひととき盛大で、ここだけでも400人の生贄が捧げられたという<sup>注42</sup>。

これまで述べたような定期的な人身供犠とは別に、何らかの特別な行事の際に人身供犠が行われることもあった。その最たるものが、1487年にテノチティトランのテンプロ・マヨール Templo Mayor の落成式に際して催された祝宴である。この神殿では、ウィツィロポトリに多くの生贄が捧げられることになるのだが、モトリニアがスペイン皇帝カルロス5世 Carlos V に宛てて書いた書簡によれば、僅か4日間に8万4000人もの人々が供犠に供されたという<sup>注43</sup>。この数字は誇張だとしても、数千人の人々が生贄に捧げられたと考えられている。生贄となる捕虜は四列に並ばされ、四つの通りから人身供犠が行われる神殿の上の台まで引き立てられた。当時のアステカ王アウイソトル Ahuizotl が先ず最初に生贄の胸を切り開き、心臓を取り出した。テスココやトラコパン Tlacopan などの他の都市の王達がそれに続き、彼らが疲れると数十人の神官が交代した。こうして、いつ果てるともなく人身供犠は続けられたという。テスココの最後の王ネサワルピリ Nezahualpilli の玄孫でもある年代記作者フェルナンド・デ・アルバ・イシュトリルショクトル Fernando de Alba Ixtlilxochitl (1568?-1648?) が言うように、まさに「この殺戮は、歴史上、空前絶後」であった<sup>注44</sup>。

又、非常時における人身供犠を行った例もある。最後にそれを紹介したい。スペイン人が現れた折り、それを見に行くよう命じられて行き、戻ってきた使者達に対して、第9代王モクテス

マ・ショコヨツイン Moctezuma Xocoyotzin は生贄の捕虜の胸を切り開いて殺し、その血を彼らにかけた。その理由としてサアグンは、彼らが危険な所に行ったことと、神々と話をしたことの二つを挙げている<sup>注45</sup>。このように、時節や周期とは無関係に、人身供犠が非常時に随時行われることもあった。

## 5. アステカの人身供犠の解釈

さて、それではなぜアステカ人はこのように現代人の目には残酷とも映る人身供犠を行い続けたのであろうか。あるいは、我々は彼らが行った人身供犠をどのように解釈すべきなのであろうか。人身供犠が様々な状況下で行われたことを考えると、その理由についても同様ではなかったであろう。そこで、以下にいくつかの考えられ得る解釈について述べてみたい。

### (1) 宇宙観に基づく解釈

様々な解釈のうち、最も人口に膾炙しているのが、現在の世界の創造神話にまつわるものであろう。アステカ人にとって、太陽はあらゆる邪悪なものが潜む暗黒の世界から彼らを救ってくれる存在であった。彼らは、太陽は宇宙の暗闇の中で、無数の星と戦っていると考えた。その星よりも多くの人間を太陽に捧げることで、栄養を与えなければならない。さもなければ、太陽は戦いに敗れ、人間界は再び暗闇に支配されるようになる<sup>注46</sup>。

そもそも太陽が誕生したのも、神々の犠牲のおかげであった。『フィレンツェ絵文書』Codice Florentino と『太陽の伝説』Legenda de los Soles によると、アステカ人は他のメソアメリカの諸民族と同じように、現世に先立って四つの世界が存在していたと信じていた。それぞれの世界は様々な災害によって破壊され、現世は5番目の世界「太陽界」に属している。しかし、現世ができ上がり、人間が作られた後も、まだ太陽はなかった。そこで神々は暗闇の中をテオティワカン Teotihuacan に集まり協議した。その結果、テクシステカトル Tecuciztecatl とナナワツイン Nanahuatzin

注43 モトリニア (1979b) p.514-5. 第6代王アシャヤカトル Axayacatl の曾孫フェルナンド・アルバラード・テソソモック Fernando Alvarado Tezozomoc の『メヒコの記録』Cronica mexicana にも、2万人もの生贄が捧げられたと記されている。

注44 グリュジンスキ (1992) pp.53-6.

注45 サアグン (1980) p.25.

注46 増田 (1963) pp.79-80.

と言う2柱の神が太陽になることになった。2人は太陽になるために火の中に飛び込んだのだが、先に飛び込んだナナワツインが太陽になり、炎に怖じけついて飛び込むのを一旦躊躇したテクシステカトルが月になった。こうして太陽と月が現われたものの、両方とも動くとはしなかった。そこで神々は、自分達が死ぬことで太陽と月を動かすことに決めた。こうして、神々が自己を犠牲にすることによって、太陽と月はようやく動き出した。

この神話からわかるように、太陽と月が生まれ、動くようになったのは、神々が自らの身を犠牲に捧げたからであった。従って、人間も自分達に恩恵を施してくれた神々に報いるために、犠牲を捧げなければならないと考えたのである。しかも、こうしてできた、言わば「動きの太陽の世界」である現世は、地震と飢饉が起こって終末を迎えると信じられていた。この終末を迎えないようにするためには、太陽に活力を与え続けねばならなかった。火山地帯に属するメキシコでは、地震は珍しくない。地震が起こる度、彼らはこの世の終わりの恐怖に怯えていたことは想像に難くない。従って、太陽の化身と考えられ、戦士の神であるウィツィロポチトリへの供犠は特に重要であった。この神は、夜の暗闇の中で、無数の星と戦わねばならなかった。ウィツィロポチトリがこの夜毎の戦いに勝って初めて、毎朝太陽が昇ることができると考えられていた。逆にウィツィロポチトリがこの戦いに敗れると、太陽は昇らず、現世は消滅してしまうと考えられていた。そうならないために、ウィツィロポチトリは常に強く活力に満ちていなければならない。そのためには、人間は彼に食物を提供し、太陽が常に勝ち続けるようにしなければならない。神々が好む食物であるチャルチウアトル *chalchuiatl* (貴重な水)、すなわち人間の血を捧げ続けねばならない。つまり、人身供犠の際に流される血は、生命力の源泉である「貴重な水」とみなされ、太陽を中心とする宇宙の運行に不可欠と考えられていた。アステカ人が人身供犠を行う正当性は、このような考えに基づいていた、というのである。

## (2)強化儀礼としての解釈

しかし、この解釈では、先に見た月毎に行われた祭を説明することができない。各月に行われた祭が、どのような性格の神に捧げられたものだったかを具体的に見ると、次のようになる。

アトルカワロ

雨の神々に仕える神々

水の女神

風の神

トラカシペワリストリ

植物の再生を司る神

トソストトリ

雨の神

ウエイ・トソストリ

トウモロコシの穂の神

トシュカトル

神の中の神・戦士の守護神

再生する植物の女神

若いトウモロコシの女神

大地母神

塩の女神

エツアルクワリストリ

雨の神々

テクイルウィトトリ

塩の女神

ウエイ・テクイルトル

実がなる前のトウモロコシであるシロ

テの女神

トラシヨチマコ

戦いの神

シヨコトル・ウエツィ

火の神

オチパニストリ

大地母神

テウトレコ

よそに出かけていた全ての神々

テペイルウィトル

雲が湧く高い山々

ケチョリ

狩猟の神

パンケツァリストリ

戦争の神

アテムストリ

雨の神々

ティティトル

大地母神

イスカリ

火の神

これを見ればわかるように、各月の祭の多くが、農耕に関わる神々のためのものなのである。従って、人身供犠を含む儀礼は、豊穰を願う農耕儀礼的性格を持つ強化儀礼の一種であり、いわゆる年中行事でもあったのである。すなわち、人身供犠を行うことによって、規則的に雨が降り、作物が実り、土地の生産性が保たれることを願ったのである<sup>注47</sup>。

#### (3)人口統計学的解釈

クリスチャン・デュヴェルジェ Christian Duverger によると、北方から南下してきたナワ Nahua 系部族と土着の定住民との間で、限られた土地を巡っての争いが絶えず、アステカ人による統一以前はメキシコ中央高原一帯は慢性的な戦争状態にあった。そして戦争が後に述べる「花戦争」という形で恒久的な制度になると共に、それにつきものの人身供犠が、戦争を価値づけ、イデオロギー的に正当化する手段となった、というのである<sup>注48</sup>。

#### (4)即位儀礼としての解釈

アコスタによると、どんな王でも、即位するためにはどこかの地方を攻略し、生贄にするための多数の捕虜を捕えなければならなかった<sup>注49</sup>。そうすることにより、彼がこの世界を維持し、治めるだけの力を持っていること、すなわち自分が正当な王位の継承者であることを顕示しようとしたのであろう。

#### (5)状況儀礼(危機儀礼)としての解釈

コルテスやディアス・デル・カスティージョなど実際に征服戦争に参加したスペイン人が書き残した史料や、その後に書かれた年代記等には、征服戦争の最中にアステカ人によって捕らえられたスペイン人や、彼らに同盟したトラスカラ人 Tlaxcaltecas などのインディヘナ

Indigena が生贄に捧げられたことが、随所に記されている。本来であれば、戦いにおいて捕らえた捕虜は、先述した定期的に行われる年中行事としての人身供犠や、あるいはテノチティトランの大神殿 テンプロ・マヨールの落成式のような特別の場合に行われる人身供犠のためにとっておかれたはずである。それを待たずに戦いの最中に生贄を捧げたのは、それとは別の目的があったためと考えられる。恐らく、軍神ウイツィロポチトリに生贄の血を捧げることで活力を強化し、その使徒である自らが陥った危機的状況から脱するのを手助けしてくれることを期待したのであろう。すなわち、戦勝祈願のために人身供犠を行ったと考えられる。

#### (6)政治・経済・軍事的解釈

さて、前にも述べたように、人身供犠はアステカ人が始めたわけではなく、はるか昔から行われていたものであった。アステカと同時代でも、ユカタンのマヤ人、最後までアステカに服属しなかった国の一つであるミチョアカン Michoacan のタラスコ人 Tarascos、トラスカラ人、 Cholula 人、ペラクルスのトトナカ人など、様々な国や地域で行われていた。ただ、それを国家的な行事にし、他とは比較にならないくらいに大々的に行ったのがアステカ人であった。その理由は、これまで述べてきた創造神話に基づく宇宙観に基づく説等だけでは説明がつけられないように思われる。そこには、アステカ人にとって何らかの意図があったはずである。そしてそれを解明するには、アステカ人の国が膨張していく中で行われた政治的意図の込められた宗教改革が鍵になると筆者は考える。そこで、ここではその点について述べてみたい。

第4代王イツコアトル Itzcoatl は、1428年にアスカポツアルコ Azcapotzalco のテパネカ人 Tepanecas を壊滅させ、その結果アステカ王国はメキシコ中央高原最大の国家にのし上がる。この当時実質的にアステカを支え、大き

注47 グリュジンスキ (1992) pp.56.

注48 グリュジンスキ (1992) pp.166-7.

注49 アコスタ (1966) p.199.

注50 『ラミレス絵文書』 Codice Ramirez に、イツコアトルが「トラカエレルに言われたことしかしなかった」と記されていることからわかるように、実質的には彼がアステカの指導者であった。レオン=ポルティーヤ (1985) p.55.

な権力を握っていたのが、王の最高顧問トラカエレル Tlacaelelであった<sup>注50</sup>。彼はシワコアトル Cihuacoatl という特別な称号を与えられ、その後モクテスマ・イルウィカミーナ Moctezuma Ilhuicamina、アシャヤカトル Axayacatl と三代のアステカ王に仕え、死ぬまで一連の改革を実行し続けた。

たとえばその一つに、歴史の改竄がある。テスココ湖周辺のアスカポツアルコ、ショチミルコ Xochimilco、クイトラワク Cuitlahuac、チャルコ Chalco を破った後、彼は被征服民族の全ての絵文書を焼き捨てさせた。それらの絵文書では、当然のことながら、アステカ人のことが重視されていないからである。この焚書を正当化しようとする次の詩が伝えられている<sup>注51</sup>。

彼らの詩がしるされていた  
しかし 焼かれてしまった  
メヒコをイツコアトルが治めていたときに  
ある決議がなされた  
メシーカ Mexica の重臣たちは言った  
誰もが絵文書を知ることは都合が悪いと  
従っている者たちは  
取り乱してしまうだろう  
大地は歪んでしまうだろう  
なぜなら  
それには多くの嘘が隠されているから  
それに登場する多くの人々が  
神のようにみなされているから

焚書を行った後、それらの絵文書に書かれていた内容を書き換え、アステカこそかつて中央高原に覇を唱えたトルテカ Tolteca の伝統の真の継承者だとした。これにより、彼はアステカ人に誇りを持たせるような意識改革を行い、新たな征服活動を容易ならしめようとしたのである。こうして、アステカ人は近隣諸国を手始めに、オアハカ Oaxaca、チアパス Chiapas、グアテマラなど遠隔地への征服活動にも乗り出していくのである。

そして、彼が行ったもう一つの重要な業績が、

「花戦争」の導入である。先にも述べたように、人身供犠の儀礼自体は、メソアメリカに古くから伝わる伝統であった。それを確固とした神話に基づく形で根柢づけをし、大規模な国家的行事として体系づけ、さらに「花戦争」を創案することで恒常化を図ったのが、このトラカエレルであった。

「花戦争」とは、生贄に捧げるための捕虜を手に入れるためにのみ始められた戦争のことで、アステカの周囲のナワトル語文化圏のトラスカラ、チョルーラやウェシヨツインコ Huexotzinco などの都市との間で組織された。常に太陽神ウィツィロポチトリに心臓と血を捧げるための生贄に事欠かないようにし、そうすることで現世である第5番目の太陽の時代が滅びないようにするために、トラカエレルはこのような制度を考え出したのである<sup>注52</sup>。

いずれにせよ、アステカ人はトラカエレルによって持ち込まれたこのような宗教軍事観を受け入れ、スペイン人が現われるまで守り続けた。メキシコ市の周辺では、征服後も隠れて人身供犠は盛んに続けられたという<sup>注53</sup>。

しかし、このアステカ人独自の宇宙観の背後にも、戦略的意図が潜んでいるように思われる。つまり、アステカ人がウィツィロポチトリ神に仕える使徒としての使命を果たす特別な部族であり、ウィツィロポチトリに捧げる生贄を求めするために戦争を行うということは、彼らの征服活動を正当化することにつながるからである<sup>注54</sup>。独自の宗教軍事観を導入したトラカエレルの本当の意図は、まさにこの点にあったと考えられる。事実、トラカエレルが補佐していた三代の王の時代に、アステカの領土は飛躍的に拡大するので

注52 従って、彼らにとって戦争は相手を殺すのではなく、生きて捕えることが目的であった。捕虜にしておいて、後に神々に捧げる必要があったからである。戦場では相手を殺すことが普通であるスペイン人との戦いに、これでは不利であったことは明らかである。少数のスペイン人がアステカ人との戦いに最終的に勝った要因の一つに、このような戦争のやり方の違いもあったと思われる。

注53 モトリニア (1979a) p.67。

注54 レオン＝ポルティエヤ (1985) p.130。

注51 レオン＝ポルティエヤ (1985) p.127。

ある。第3代王チマルポポカ Chimalpopoca の時代には、アステカ王国は当時メキシコ盆地で最大の勢力を誇っていたアスカポツアルコの属国的存在に過ぎなかった。しかも、チマルポポカは、アスカポツアルコの王位継承に絡む内乱の中で、捕えられて死ぬのである。このようにアステカが危機的状況に陥った中で即位したのがイツコアトルだったのであるが、トラカエレルという支えを得るや、彼はそのアスカポツアルコを滅ぼし、これ以後スペイン人が現われるまでの間、アステカ王国はほとんどの征服戦争に勝利し、勢力を拡大していくのである。

人身供犠は政治的支配の道具でもあった。捕虜を人身供犠に供することで、戦争に敗れてアステカ人に恨みを抱いている首長や戦士を物理的に抹殺すると共に、敵に恐怖心を吹き込むことで支配を容易にした<sup>注55</sup>。たとえば、三国同盟（テノチティトラン、テスココ、トラコパン）にまだ服従していない首長や、同盟に敵対して敗北した者の近親者は、テノチティトランで行われる人身供犠に定期的に招待された<sup>注56</sup>。そして彼らは、戦争で捕えられた彼らの親族が目の前で生贄に捧げられるのを見せつけられたのである。もし招待を断われれば、それを口実に戦争が仕掛けられたので、招待を断わることもできなかった。中でも特に大規模だったのが、1487年にテノチティトランのテンプロ・マヨールの落成式に際して催された祝宴であり、それがいかに大規模であり、かつ凄惨なものであったかは先に述べた通りである。

このように、人身供犠が敵対する国に恐怖心を植え付ける役割を果たしたことは確かだが、同時に限らない憎しみの念をも植え付けた。トラスカラ人やトナカ人がその良い例で、彼らはスペイン人の征服事業を助けて、大きな力となった。彼らがスペイン人の味方となったのは、ただただアステカ人が憎かったからである。この意味では、人身供犠のための「花戦争」は双刃の剣だったと言える。

注55 グリュジンスキ (1992) pp.56-7.

注56 グリュジンスキ (1992) p.47.

注57 レオン=ポルティーヤ (1985) p.134、及び、グリュジンスキ (1992) pp.152-153.

又、大量の人身供犠を実施することを可能にした「花戦争」も、単に宗教的理由からのみ行われたとは考えられない。それは、トラカエレルがテノチティトランにテンプロ・マヨールを建設するに当たって語ったと伝えられている言葉からも窺われる。そこで、以下にそれを引用し、具体的に検討してみたい<sup>注57</sup>。

「大神殿が完成した暁には、その落成を祝って十分な数の太陽の子たちを生贄に捧げよう。そのために私は今日よりすべきことをずっと考えてきた。後でやるより今すぐやることに価値がある。というのは、われらの神は何らかの口実があるまで戦争を待つわけにはいかないではないか。そうではなく、軍隊を連れてわれらの神が生贄を買ったり、人間を食べられる便利な市場を捜すべきだ。欲しいときに、土なべの近くに熱いトルティーヤ *tortilla* があれば申し分がないだろう。そうすればわれらの民や軍が市へ出かけて、かれらの血と頭と心臓と生命でエメラルド、ルビーなどの宝石、出来ばえのよい幅が広くて長い輝くばかりの羽根を買い、偉大なウィツィロポチトリ神に仕えることができる。

私、トラカエレルは主張する。こうしたティアングイス *tianguiz* (市場) は、トラスカラ、ウェショツィンコ、チョルーラ、アトリスコ *Atlixco*、トリリウキテペク *Tliluhquitepec*、テコアク *Tecoac* の各都市に設置されねばならない。なぜなら、もし市場がもっと遠くに、例えばヨピツィンコ *Yopitzinco* やミチョアカン、ワステカ *Huasteca* 地方、われらの支配下にある海岸地方などに設けられるならば、われらの軍隊は苦勞して遠くまで遠征せねばならないだろうから。これらの国々はとても遠く、その上、われらの神はこれら野蛮人の肉をお召しにならないだろう。われらの神は、その肉を堅くて何の風味もない白パンのようだとお考えになるだろう。繰り返すが、やつらは異様な言葉を話す野蛮人なの

だ。それゆえ、私が挙げた六つの都市こそ、市場を設ける最適の場所であろう。われらの神にとって、これらの都市の住民は、竈から出したばかりの、柔らかくておいしい暖かいパンのように感じられることだろう。そして、これらの都市に戦争を仕掛ける際には、彼らが全滅しないように、国が滅びないように、気をつけねばならない。というのも、われらの神が空腹になり、ご馳走を楽しみたいと思われることに、われらは自由に市場に赴き、神の食物を手に入れることができねばならないのだから。

このトラカエレルの言葉には、アステカ人にとっての「花戦争」の戦略的意図がいくつも読み取れる。先ず一つには、遠隔地への遠征を嫌い、比較的近距离の都市との間で「花戦争」が行われている、という点が挙げられる。その理由として、彼は遠隔地の民は蛮族であり、肉は固くて風味がないので神々は喜ばない、と言っている。しかしそれ以上に、遠隔地の国との戦いでは「われらの軍隊は苦勞して遠くまで遠征せねばならない」と正直に述べているように、輸送用の大型家畜がおらず、車の実用化もできなかった彼らにとって、遠隔地への遠征は大変な労力を要したということと、遠方の未知の敵との戦いにはより危険も伴うという実利的な要因の方が、理由としては大きいであろう。それに比べ、テノチティラン周辺の専らアステカに服従する都市、あるいは服従していないにしても既知の都市との戦いの方が遥かに楽であり、生贄用の捕虜だけでなく、それと共に送られる貢納品も確実に手に入れることができるのである。又、トラスカラのような服属していない国に対しては、常に軍事的プレッシャーを与え続けることもできる。「花戦争」を始めたのは、こういう現実的な利害に関わる面も大きいと思われる。確かにアステカには宗教が浸透してはいたが、神権政治が行われていたわけではなく、社会は世俗的だったのである<sup>注58</sup>。

二つには、生贄にされる者は同胞であっては

ならない、という規定が挙げられる。矢張りトラカエレルの言葉にもあるように、生贄に捧げる者は遠い地方の者ではならなかったが、しかも同じ社会の者でもいけなかった。生贄は同じ言葉、すなわちなワトル語を話すが、別の国の者でなくてはならないとされていた。もし生贄が神々に捧げられる名誉なことであれば<sup>注59</sup>、別の国でなく自国の者でもいいはずである。しかし実際には、同胞も、又遠征が困難な遠い地域の人々も生贄にはせず、捕虜を獲得するのが比較的容易な地域とばかり「花戦争」を行い、捕虜と共に莫大な貢物を恒常的に得ようとしたというのは、アステカの側の御都合主義のように思えてならない。第一、遠い地域の人間の肉は固くて神々が喜ばないと言いながらも、遠いどころか、彼らにとっては全く得体の知れない存在であるはずのスペイン人を、捕まえるや片っ端から生贄にしまっているのである。

三つには、相手を滅ぼさないよう気をつけねばならない、と述べている点が挙げられる。その理由は、「われらの神が空腹になり、ご馳走を楽しみたいと思われることに、われらは自由に市場に赴き、神の食物を手に入れることができねばならない」からだとしているが、本当の意図は、貢物の確保にあったのであろう。アステカに服属する都市は、その地方に応じた産物を貢物として送らねばならなかった<sup>注60</sup>。それらは定期的な祭礼の祭に惜しみなく消費されただけでなく、王家だけでなく都市住民の生活も支え、戦費も賄った。このように、貢物はアス

注59 モトリニーアは、「殺されては心臓を取り出されるにしろ、あるいは如何なる別の方法で殺されるにしろ、彼らは自ら進んで死ぬのだと考えたら大きな間違いである。彼らはいずれも無理やりに殺されていった。従って、犠牲者は当然自分が殺されることを大いに嘆き悲しむし、考えるだけでも恐ろしい激痛を味わうことは言うまでもない。」と述べ、人身供犠が当事者にとって喜ばしいものだとする考えを否定している。モトリニーア (1979) p.101。

注60 それは莫大な量に及び、1年に、数万トンの食料、10万着以上の綿の衣類、3万個以上の羽毛の包みなどがテノチティランに運ばれたという。グリュジンスキ (1992) p.48。

注61 Kobayashi (1993) p.93。

注58 スーステル (1971) p.48。

テカ人にとって不可欠なものになり、その供給の確保の大義名分として、神話的宇宙観に基づく定期的な戦争、すなわち「花戦争」が必要であったのであろう。又、領土拡大を伴う征服活動の恒常化の一因は、貢納を絶やさないとということにあったと考えられるのである。小林致広が指摘するように、アステカ人にとって戦争は捕虜のみならず、再分配のための様々な物資を獲得するための重要な「生産活動」であったと言える<sup>註61</sup>。

更に、生贄に捧げる捕虜は、身分の高い戦士ほど、また勇敢な戦士ほど尊重されたという。逆に、どんな種類であれ、体に障害を持つ者は生贄にふさわしくないと考えられた。これは、偉大な神々に捧げるのであるから、なるべく完全な人間の方がふさわしいという理由によるものだが、捕虜の身分が高ければ高いほど、勇敢であればあるほど、相手国が受けるダメージは大きいわけであるから、そういう戦略的意図があったことも考慮に入れてもいいと思われる。

以上に述べた理由から、トラカエレルが「花戦争」を組織した主な理由は、宗教的というよりも、むしろ貢物による富の獲得といったような世俗的目的のほうが強かったのではないかと思われてならない。それと共に、定期的に周辺の国々にアステカの強大さを再認識させることによって、アステカへの恐怖心を植え付けることも意図にあったであろう。そうすることで、ますます貢納はスムーズに運んだであろう。勿論、だからと言って、神に血を捧げる必要性を感じていなかったというわけではない。従来は、それが余りにも強調され、他の要因が軽視され過ぎていたのではないか、と言いたいのである。

## 6. おわりに

最後に、アステカの人身供犠についてまとめてみたい。

アステカ人が人身供犠を行う元々の理由としては、神話に由来する彼ら独自の宇宙観に基づくものとする説が最も流布してきている。つまり、現世である「動きの太陽の世界」は神々が犠牲となってできたものであり、この世界を支える太陽神が夜の闇の中での戦いに敗れること

により現世が滅亡しないように、神が好む食物であり活力の源である人間の血を捧げなければならない、すなわち人身供犠は現世を維持させるために必要であった、という説である。

しかし、人身供犠が国家的な大行事化し、「花戦争」が制度化されたのには、もっと世俗的・現実的的目的が隠されていた。それは、近隣諸国に対し、定期的な戦争でアステカの武力を示威することで、生贄のための捕虜と同時に、貢物の供給を安定化させることであった。先に述べた宇宙論は、人身供犠を行う原因ではなく、むしろ現世を維持するという重要な職責を担っているのがアステカ人なのだと主張することにより、貢納システムを安定させるという真の目的が隠された征服を正当化するために利用されたのである。

アステカ人にとって最もふさわしく、羨望に値する運命とは、戦死、ないし人身供犠に供されることであったとされる。この考えにしても、支配者にとって都合の良いものである。戦いで死んだり、捕虜になって人身供犠に供されるのが名誉なことだという教えを吹き込めば、戦士は戦場で安心して勇敢に働くことができるであろう。つまり、もし戦士がこの考えを信じていたとしたら、この思想は彼らの士気を鼓舞するのに大いに役立ったであろう。しかし、事実その通りであったであろうか。生贄に捧げられる捕虜は喜んで我が身を捧げたと言われるが、逆に力づくで運ばれ、死とその苦しみを強烈に味わされたという報告も少なくないのである。そのために、麻薬が用いられた。

このように、一般に通説として知られている考えには、再考の余地が少なくない。本稿ではその一端を示したのであるが、渉猟すべき史料も足りないし、実証性も不足しているのは筆者自身が誰よりも自覚している。「試論」と題した所以である。今後はこのテーマを更に掘り下げ、アステカ社会における人身供犠の意味の解明に努めたい。

参考文献

アコスタ、ホセ・デ

1966 『大航海時代叢書 IV 新大陸自然文化史 下』岩波書店

宇野公一郎

1987 「人柱」『文化人類学事典』弘文堂

梅木秀徳

1974 『大分の伝説〈下巻〉』大分合同新聞社

Ordoño, Cesar Macazaga

1985 Diccionario de antropologia mesoamericana, pp.407-12.

狩野千秋

1983 『世界史研究叢書 25 マヤとアステカ』近藤出版社

カマルゴ、ディエゴ・ムニョス

1994 「トラスカラ史」『アステカ帝国滅亡記 インディオによる物語』法政大学出版局

グリュジンスキ、セルジュ

1992 『アステカ王国 文明の死と再生』創元社

コウ、マイケル

1975 『メキシコ インディオとアステカの文明を探る』学生社

小西正捷

1987 「クッティア・コンド」『文化人類学事典』弘文堂

Kobayashi, Munehiro

1993 "Indumentaria y estratificacion social en la sociedad azteca", in Tres estudios sobre el sistema tributario de los mexicas, Centro

de Investigaciones y Estudios Superiores en Antropologia Social, Kobe City University of Foreign Studies.

コルテス、フェルナンド

1980 「カルロス5世皇帝に宛てたフェルナンド・コルテスの第二報告書翰」『大航海時代叢書第II期 12 征服者と新世界』岩波書店

コルテス、フェルナンド

1980 「カルロス5世皇帝に宛てたフェルナンド・コルテスの第三報告書翰」『大航海時代叢書第II期 12 征服者と新世界』岩波書店

Gonzalez Torres, Yolotl

1985 El sacrificio humano entre los mexicas, Fondo de Cultura Economica

サアグン、ベルナルディーノ・デ

1992 『アンソロジー新世界の挑戦 9 神々との戦い I』岩波書店

サアグン、ベルナルディーノ・デ

1994 「フィレンツェの絵文書」『アステカ帝国滅亡記 インディオによる物語』法政大学出版局

サアグン コルテス ヘレス カルバハル

1980 大航海時代叢書第II期 12 征服者と新世界』岩波書店

Schele, Linda

1984 "Human Sacrifice Among the Classic Maya", in Ritual Human Sacrifice in Mesoamerica, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

スーステル、ジャック

1971 『アステカ文明』白水社

Soustelle, Jacques

1984 "Ritual Human Sacrifice in Mesoamerica : an Introduction", in Ritual Human Sacrifice in Mesoamerica, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

染田秀藤

1995 『大航海時代における異文化理解と他者認識—スペイン語文書を読む—』溪水社

染田秀藤

1997 『人と思想 143 ラス=カサス』清水書院

Taube, Karl

1995 Aztec and Maya Myths, University of Texas Press.

タウベ、カール

1996 『アステカ・マヤの神話』丸善

高山智博

1966 「アステカの暦」『大航海時代叢書 IV 新大陸自然文化史 下』岩波書店

高山智博

1979 『アステカ文明の謎 いけにえの祭り』講談社

棚瀬襄爾・大藤時彦

1973 「人身御供」『世界大百科事典第25巻 ハーヒ』平凡社

ディアス・デル・カスティージョ、ベルナル

1986a 『大航海時代叢書エクストラ・シリーズ III メキシコ征服記 一』

ディアス・デル・カスティージョ、ベルナル

1986b 『大航海時代叢書エクストラ・シリーズ IV メキシコ征服記 二』

ディアス・デル・カスティージョ、ベルナル

1987 『大航海時代叢書エクストラ・シリーズ V メキシコ征服記 三』

ドゥラン、ディエゴ

1994 「ヌエバ・エスパーニャのインディアス史および大陸付属諸島史」『アステカ帝国滅亡記 インディオによる物語』法政大学出版局

ドゥラン、ディエゴ

1995 『アンソロジー新世界の挑戦 10 神々とのたたかい II』岩波書店

戸塚ひろみ

1986 「人柱伝説」『日本伝奇伝説大事典』角川書店

トドロフ、ツヴェルタン

1986 『他者の記号 アメリカ大陸の征服』法政大学出版局

トバル、フアン・デ

1994 「ラミレスの絵文書」『アステカ帝国滅亡記 インディオによる物語』法政大学出版局

波平恵美子

1988 「人身御供」『日本大百科全書第19巻 はーひん』小学館

ニコルソン、アイリーン

1992 『マヤ・アステカの神話』青土社

ボド/トドロフ

1994 『アステカ帝国滅亡記 インディオによる物語』法政大学出版局

- 増田義郎  
1963 『古代アステカ帝国 征服された黄金の国』中央公論社
- マン=ロ、マリアンヌ  
1984 『イスパノアメリカの征服』白水社
- モトリニア、トリービオ  
1979a 「ヌエバ・エスパーニャ布教史」『大航海時代叢書第Ⅱ期 14 ヌエバ・エスパーニャ布教史』岩波書店
- モトリニア、トリービオ  
1979b 「皇帝カルロス1世への書簡（一）1555年1月2日、トラスカーラにて」『大航海時代叢書第Ⅱ期 14 ヌエバ・エスパーニャ布教史』岩波書店
- ラス・カサス、バルトロメー・デ  
1995 『アンソロジー-新世界の挑戦 8 インディオは人間か』岩波書店
- ランダ、ディエゴ・デ  
1982 「ユカタン事物記」『大航海時代叢書第Ⅱ期 13 ヌエバ・エスパーニャ報告書 ユカタン事物記』岩波書店
- ル・クレジオ  
1991 『メキシコの夢』新潮社
- レオン=ポルティーヤ、ミゲル  
1985 『古代のメキシコ人』早稲田大学出版部
- Leon-Portilla, Miguel  
1989 Vision de los vencidos : Relacion indigenas de la Conquista, Universidad Nacional Autonoma de Mexico.
- レオン=ポルティーヤ、ミゲル  
1994 『インディオの挽歌 アステカから見たメキシコ征服史』成文堂
- 礪川全次  
1998 『歴史民俗学資料叢書 5 生贄と人柱の民俗学』批評社
- ワシュテル  
1984 『敗者の想像力 インディオのみた新世界征服』岩波書店
- 作者不詳  
1994 「オーバンの絵文書」『アステカ帝国滅亡記 インディオによる物語』法政大学出版局
- 作者不詳  
1994 「トラテロルコ編年史」『アステカ帝国滅亡記 インディオによる物語』法政大学出版局